

雪の朝 : 雑録

著者	滝川生
雑誌名	龍南會雑誌
巻	7 7
ページ	4 8 - 5 3
発行年	1900-02-28
その他の言語のタイトル	雪の朝 : 雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/5487

らず。嗚呼甲東素より大智なり、遂に第二流の英雄たるを免れざりき、三萬の子弟、南州の爲には、敢て死に赴くと雖、甲東の爲には、恐らくは、其惜しむ所にありまならむ。

時に夕照前に當りて松籙習々たり當年の矢叫びか自然の譏諷か、獨旅熊城の一客爲に長涙滲々たり。

雪の朝

滝 川 生

『泰明の雪蹈み破る首途かな』 かく歌ひ乍ら我家の軒をふみ出したは店の掛け時計が一月七日の午前五時を正に報したる時であつた。昨日の晝頃より、雨まじりに降り出したる初雪の大雪、夕方になつても止まず、一夜降り通したので、雪は意外にも深かつたのである。二階雨戸少々押あけて覗いて見た時は、瓦の上に三寸位しか積ひで居なかつた様で、既にふりやむた空合に、星が二ツ三ツ見えたナニ此の大雪にも、父上母上の留むるのも聞かで、授業は九日から始まる、廿六里を目付は出来ぬ、雪が降つても、火のふつても、思ひたつたか吉日、是非今日から立ちますと、吾儘を云つて、寒そらに竈の前に蹈つて居る下女を忙しがらせながら、食事をすまへ、草鞋ふみまめ、さて潜り戸をかいくつて大路に出ると、すつかり脚絆の殆ど半を沒えたので、吾ながらこれとは思つたのである、街頭の灯火は大方消えてしまつて、雪あかりとは云へど、有明の月もない頃だから、ちぎれ／＼の雲間よりくる星の光りがかすかに吾が行く手を照すのみであつた。

『雪あかりとか聞けば、さまでとは思はさうだが、さても暗きことかな、提灯參らせん、幸ひ岩戸村

の茶屋に返す筈があるに』とまづち取りをへて母上のもち出で給へるは、田舎らまづはあれど舊からず、あやしき紋のつきたるブラ／＼である。夜があくれは邪魔ものとは思ふたが、若戸迄あれば、丁度夜が明けて直ぐ返すといふ好都合此上なまど、妹の手より受取りて、さらば、と門にたち給へる人々の顔みかへれば、いづれも、途中は用心まてと計りて、皆覺束なげな面色であつたので、流石に我も何となく躊躇らはれもまたのであるが、今になつて思ひやるも極り悪く、まゝ上行きつく處までと思切つて、ざく／＼と蹈む毎に音して、半ば氷つた雪の中を勢よくふみ出した。常時ならは、街はづれ迄は見送らるゝが例であるが、今日は此雪で、且ついつもよりも出立の時間が早かつた爲め。門口で別れたので、何となく物足らぬ様な、悲しい様な氣がして、それに足先きは錐を刺す様に、冷いといふよりもむしろ痛む斗りに覺えるので、足はどかくすゝみがてである。携ふる處は、笥一枝、カバン一個、孤影悄々ふりかへりがちに歩を進むれば、戀まき人々の停すむて居つた我家の門も、いづしにか少しつき出てたる郵便局の門松の影になつて、もう見えぬ。従ふものは面白そうに尾をふつてくるボチと名つけたる父上の愛犬のみである。それも街はづれまで來れば、此に主人の遠行を覺りてか、見送る様にポストの傍に停むで我をながめて居つたが、終に引返してまゐつたので、いよ／＼我は獨りとなつた。せめて犬でもと思つて、ボチ／＼どふりかへつて呼んで見たが、返つてこない。折からかなたの親しき友の屋敷の見越の松に夥しくつひて居つた雪がどさりどすさしき音をえて落ちた。友はいかなる夢を破られたであらうか。

街を出て二三軒の草屋がたちならむで居る小坂をのほると、道は峽田の間を一直線に松山の中に吾を導いた。提灯をもつて居るから、あたりの景色はよくは見えぬが、松の枝には夥まき雪が積つて

居ると見えて、折々非常な音してばら／＼と落ち來り、幾度か吾が頭の上に落ち來るかど、さらでも凍はわがつて居る吾が身をあたら臆まで冷さしめた。

白い帽子を冠ぶつて、停むで居る人の様なのを見付けて、提灯さまつくれは、これは吾が幼き折り、此處を通つて、悪太郎の爲めに屢々此影から嚇された事のあつた、今も昔の石地藏である。後は墓原つゞきで、黒い石塔に白い雪が班らに隈どつて、何となくすさまじい景色であつた。此松林を抜けて、三四の農家を後にすると、小廣い津留で、此津留の程に一條の小川がある、玉田橋といふて村の名を其橋の名にした、川相應な小さな橋がかゝつて居る。鉦打ちふつて、欄干の雪を散らしながら、我は此橋を渡りかけて、ふとあゝ去年の春はと思ひ出えた。あゝ去年の春、思へば四月の春期休業がすむで、同じく熊本へと旅たつ折りであつた、時は四月で、而かも晴らゝかな天氣の日であつたから、勿論今日の様に雪は降つて居らぬのみか、うら／＼と霞み渡つた春の山に、雪ならぬ花の白雪、遠くはの白う見渡されて、鳥の聲水の流れ、何れも春の歌の響きのこもらぬはなき、いかにも悠暢な春景色であつた。友は小學教員の洋服すがた、學校へ出勤の序なればと、打つれだちて吾を此橋の上まで見送つてくれたその折り、あゝ吾も世がまゝならば』と、後は得云はず、涙を揮つて、希望に満てる勇ましさ我が後姿を見送つた友、あゝその友は今何うして居るだらうか、見越の松の雪の音に、冷かなる夢を覺えて後、又如何なる夢を結んだであらうか、新年宴會の折りにも、頼りに我が遊學を羨むて居るらしい口振りであつたが、幼き時より、袖をつらね机をならべて、何時までもかくて進退をともにせんと誓つた友の事だから、彼をば山間の僻地にのこまて、我ひとり遊學の途の上ることの、いかにも心苦しさ思のせられて吾は昨夜花袋の『ふる郷』壹冊、我

が思にかへて送つて置いたが、彼はあれを讀むでであらうか、讀むで又何う感じたであらうか。彼の勤々たる功名心を徒らに燃さめ、一層苦悶の種を蒔かめんよりはと、今朝吾が友にもついで、潜につとめ出立せるも、心ありてとは知るや知らずや。思へば、虚榮に走すも功名の心はど果敢ないものはない、或る論者は、功名心は社會を刺激する興奮劑で、甚た尊むべきものゝ様に云ふが、成程道に精勵せしむる一種の興奮劑には違ひない、が而し、之を譽め過す結果、動もすれば人をえて功名のために道を行ふ様な、本末轉倒な考へを有せざるに到りは爲まいか。更に一步進みて、甚しきは功名のためには其手段の道に合せると合せざるを極むるの暇がない様な弊に陥りは爲まいか。否滔々たる天下此本末を能く曉得まへて居るもの、果えて幾人あるであらうか。或人は云ふ善を爲えて功名を得ると、功名のために善をなすと、其究極の結果は同じであらば、何の區別する必要があるかと、思ふに此人は、人間は形体のみに生きて居ると思つて、又心に於て生きて居ることを知らないと思はれる。功名のために善を爲るは、これは偽善ではあるまいか、既に偽善である、よしその物質的の効果は收むるを得たとするも、既に心的には死せるものといつても差支はあるまいか。此本末の轉倒は人をして第二の病弊に陥らまむるのである。功名にあくがるゝの極、已の天職をすてゝ邪徑にふみ入り、功名の影を追ふに憊れて、終には失望落膽の極、恨み、嫉み、の眼を以て人生を見る厭世家となるのが落ちである事實は、余り珍らしからぬ事である。或る人虚榮の幻像を例へて *that like the circle bounding earth andips; skies allures from far, yet as I follow, flies;* といへるは、實にふさはしき比喩ではないか。『塵を得て蜀を望む』これ功名心の最もはてしなく果敢なきを現せるものである。一を譽れば十を望む、十を得れば百を望む、古來功名にあくがるゝ徒、

誰か能く己が功名心を充たせ得たか、功名の烟に身を焼かれながら、苦心悶々の間に一生を終ふるものは、世に憐むべきはなからう。よま又、其功名なるものが達し得たにせよ、三寸の息止みて、主觀と客觀とが其關鎖を絶たれた曉に於て、其功名が果えて何だと云ふのか。其功名が此客觀の世界に於て永久に存在せ得るものならば兎も角、漢水の西北に流れぬ限り、功名富貴長へに存する能はざる此世の習はえ、永劫の心的存立の立脚地を求むるをはからずして、はかなき客觀の世界に、綿々として絆を絶ち得ざる浮世の人の迂濶を加減、之を憐まずて果して何をか憐む可きである。之れ吾人が、主觀的の見解よりして偽善をなみする所以である。我友の如きは、實に憐む可き此功名の風潮に漂はされむとしつゝあるのではあるまいか。教育の事業が何故に世の人の爲めにさげすまるのであるか。我を以て見れば、世に教育の事業は、眞の榮あるわざはないと思ふ。もえ功名心の上より打算せば、少くとも我國今日の有様に於て、此事業はどつすらぬものはなからう。而も心的の事業として之を見る、蓋し此事業は高尚に樂しさはなからう。我か友は何故に之を棄て、かの風潮に投せんとするか、吾れ曾て彼に告ぐるに此言を以てまた、而し彼は之を以て、吾が彼を慰むるが爲めの一時の言とまで用ゐなかつた。思へばそれも無理ならぬ事である。かく言ふ吾れ、既に〳〵屢々身を功名の願使に任せつゝあるのである。『空しき希望の迷に驅られて、此樂しき我家をすて、我はその何かたへか漂ひ行かんとはする』とは、去年の出立の記に於て。吾れが云つた語である。今また茲にくりかへさゝるを得ない、あゝ富貴、あゝ功名、それが果えて何だと云ふのか、富貴功名の尊むべき價值は何うまでも吾には了解せられない、社會を辭はす一種の酒と見るが尤も適當ではあるまいか、酒も勞働の後には一個の慰藉として極く便利なものでもないが酒そ

のものに如何なる尋むべき價があるか。長崎あたりの或る下等の勞働社會には年末に數日間酒樓に連流荒亡するが爲めに、一年間營々として苦勞する風習があるそうだが、所謂功名に酔うて東奔西走するものも亦此類ではなからうか。例のさまゝなる空想を幾度繰りかへゑつゝある間に道はいつしかはかどりて、岩戸川のはどりに着いた。此時已に夜はほのゝとあけはなれて、雪に埋れたる對岸村落の一帶、ありゝと眼前に現れ、重そうに俯伏えて居る竹叢や、高慢そうに突立つて居るハチ釣べや、さては廐の中から寒さうに首つき出して吠ゆる牛の息の白いのも見ゆる。おもしろき雪けしきに見とれて、ゑばえ停むで居つたが、此時ふと我はまだ提灯の火をともゑたまゝ立つて居るに氣が付きて、あはてゝ吹きけゑ、狂氣がたまゑいわが舉動を獨りで微笑みながら、一帶の釣り橋を渡れば岩戸村である。路傍數戸の茶店は皆起き出でゝ、主人らしきは鍬とりて店前の雪を拂ひなぞして居る、小供はさも嬉しそうに、早や雪達磨をつくるに余念はない。茶店に入れば、かねて見知りの主婦が、吾を見て驚きながら、此大雪に何處へお出なされますのうと、呆れ顔なるも可笑しかつた。が而し、此時吾と最早や『黎明の雪踏み破る首途かな』と再び躁返えて歌ふ勇氣はなかつた。』

金峰山と一夜

一 狂 生

今茲一月、學友兩三、二十日土曜の夜を、金峰の山頂に明さんとの企あるを聞き、即ち躍然手を拍ちて、行を共にせんことを約しぬ。蓋しこの山は、夙に我が耳に入り、常に我が目に映じながら、